



放送人の課題

■ 草野 仁

思えば私が NHK に入社したのが 1967 年だから、今年の 4 月で放送人生活をちょうど 45 年送ることになる。

当時は東京オリンピックなどによってテレビが爆発的に普及し、テレビというメディアは未知数の可能性を秘め、マスコミ志望者の多くの目がそちらに向き、かくいう私も受験できるのは 1 社だけという制約の中、NHK の入社試験を受けたのであった。

私自身は記者志望だったので、アナウンサーとして採用するという通告を受けたときは内定を辞退して大学院に進学することも考えたが、両親も還暦間近の高齢になっていた事情も勘案し、そのまま NHK の門をくぐることになった。

幸運なことに、地方局の勤務年数も比較的短く、オリンピックをはじめ、全米テニス、全米オープンゴルフなどの実況中継など、スポーツ放送を専門にとっても大きな仕事を数多くさせていただいた。特にスポーツ放送は筋書きのない戦いを視聴者に伝える分野なので、大方の予想を裏切る展開や世界新記録、世界最高記録の瞬間にその場にいたときの幸せは言うまでもない。と同時にそのような場面はテレビという映像メディアがあって初めて多くの人々の脳裏に焼き付けられ、後世にまで長くその興奮や感動が受け継がれることになるのである。

もちろん、スポーツに限らずテレビは映像という武器で報道やドラマ、バラエティで大きな力を発揮し隆盛を誇るのだが、その威力も日本の経済事情の悪化とともに徐々に変化が生まれ、リーマンショック辺りからの急激な緊縮財政で元気が失われていっていることを肌で

■ 草野 仁
TVキャスター

1944年生。東京大学卒業後NHKに入社。主にスポーツアナウンサーとして活躍。1985年NHKを退社し、フリーのキャスターに。司会を務めるTBS「日立世界ふしぎ発見!」は放送開始26年目に突入。



感じる昨今である。

比して、新商品の発表や新サービスの開始など、報道され世間を賑わすことの多い通信業界は本当に明るいニュースに溢れているなと感心させられる。放送業界と通信業界は隔絶した敵対関係ではないことは当然だが、情報サービスを業とする共通項からすればいいライバル関係にあるし、現在目覚ましい発展を成し遂げている通信業界から放送業界は何かを学ばねばならないのではと自問することが多くなった。

色々考えてみると、結局はやはり多くの人々に「勉強になった」「心を動かされた」と充足感を持っていただけるようなコンテンツを作り出していくこと、つまり放送の原点に立ち戻り使命を全うしていくことが最も肝要なのではと帰結せざるを得ない。

特に若年層の多くがパソコンや携帯端末の画面に夢中になる背景に彼らの希求するコンテンツが正にそこにあることが絶対的事実としてあるからだ。放送には放送法という制約もあるが、放送人としては人々の欲求に敏感なものづくりに邁進していかなければならない、と「IT」という言葉やその報道に接するたびにそう感じるのである。

